

(西暦) 2016 年 4 月 1 日

## 様々な原因による呼吸不全のため当院に入院されていた

### 患者さんの診療情報を用いた臨床研究に対するご協力のお願い

研究責任者	所属 <u>麻酔学教室</u> 職名 <u>講師</u> 氏名 <u>鈴木武志</u> 連絡先電話番号 <u>03-5363-3810</u>
実務責任者	所属 <u>麻酔学教室</u> 職名 <u>講師</u> 氏名 <u>鈴木武志</u> 連絡先電話番号 <u>03-5363-3810</u>

このたび当院では、上記のご病気で入院・通院されていた患者さんの診療情報を用いた下記の研究を実施いたしますので、ご協力をお願いいたします。この研究を実施することによる患者さんへの新たな負担は一切ありません。また患者さんのプライバシー保護については最善を尽くします。本研究への協力を望まれない患者さんは、その旨、研究責任者までご連絡をお願いします。

#### 1 対象となる方

西暦 2002 年 1 月 1 日より 2016 年 3 月 31 日までの間に、一般集中治療室にて様々な原因に伴う呼吸不全のため入院し、診療を受けた方。ただし 20 歳未満の患者さんは対象外となります。

#### 2 研究課題名

当院集中治療室における経皮的気管切開術の安全性に関する検討

#### 3 研究実施機関

慶應義塾大学医学部麻酔学教室・慶應義塾大学病院一般集中治療室

#### 4 本研究の意義、目的、方法

様々な原因により、患者さん自身の力で十分な呼吸することができない時は、お口から気管にチューブを留置して機械によって呼吸をサポートする必要があります。機械による呼吸のサポートが長期間に及ぶと予測される際には、お口からのチューブには時間的な制限があるため、気管切開といって喉の前面から直接チューブを入れて呼吸をサポートします。気管切開はこれまで直接皮膚や気管の前面にメスで切開をしてチューブを入れる方法(外科的気管切開法)で行ってきました。近年、直接メスで切開を入れるのではなく、まず喉の前面から細いワイヤー(ガイドワイヤー)を気管内に留置し、そのワイヤーを利用して徐々に穴を広げて最終的にチューブを入れる方法(経皮的気管

切開法) が普及してきました。当院でも 2009 年頃よりこの方法を取り入れて行ってきました。本研究は、経皮的気管切開法に伴い発生した合併症を後ろ向きに調査して、外科的気管切開法と比較することによって、経皮的気管切開法の安全性を検討するものです。患者さんの情報は、カルテを用いて収集します。

## 5 協力をお願いする内容

対象患者さんの診療情報を、紙カルテならびに電子カルテから収集させていただきます。

## 6 本研究の実施期間

西暦 2016 年 4 月 1 日～ 2017 年 3 月 31 日 (予定)

## 7 プライバシーの保護について

- 1) 本研究で取り扱う患者さんの個人情報、氏名と患者番号のみです。その他の個人情報(住所、電話番号など)は一切取り扱いません。
- 2) 本研究で取り扱う患者さんの診療情報は、個人情報をすべて削除し、第3者にはどなたのものかわからないデータ(匿名化データ)として使用します。
- 3) 患者さんの個人情報と匿名化データを結びつける情報(連結情報)は、本研究の個人情報管理者が研究終了まで厳重に管理し、研究の実施に必要な場合のみに参照します。また、研究終了時に完全に抹消します。
- 4) なお連結情報は当院内のみで管理し、他の共同研究機関等には一切公開いたしません

## 8 お問い合わせ

本研究に関する質問や確認のご依頼は、下記へご連絡下さい。

研究責任者 所属 麻酔学教室 職名 講師  
氏名 鈴木武志  
連絡先電話番号 03-5363-3810

以上